

題目

題材の広がりや書き方の手立て・工夫に配慮した日記指導

―白石壽文・権藤順子編著『小学校作文の生活』―

茨城キリスト教大学・大内善一

一 研究の目的

教育研究には①通時的(歴史的)研究と②共時的(同時代的)研究がある。私はこれまでこの両者を並行的に進めてきた。その成果を、例えば前者では『戦後作文教育史研究』(昭和五九年、教育出版センター)、『昭和戦前期の綴り方教育論にみる「形式」「内容」一元論―田中豊太郎の綴り方教育論を軸として―』(平成二四年、溪水社)、後者では『国語科教材分析の観点と方法』(平成二年、明治図書)、『思考を鍛える作文授業づくり―作文授業改革への提言―』(平成六年、明治図書)、『見たこと作文』の徹底研究』(平成六年、学事出版)等として上梓してきた。

一方、これら両者にまたがる研究もないがしろにはならないと考えている。優れた実践研究が十年、二十年というスパンで歴史の彼方に埋もれて行ってしまう。このような実践研究を通時的・共時的一体的研究として研究者が取り上げていくことも私たちの使命ではないかと考えている。

この方面からの研究の成果として、私は『作文授業づくりの到達点と課題』(平成八年、東京書籍)を上梓している。

同上の研究書においては、佐賀大学名誉教授である白石壽文を指導者とする作文教育研究会のメンバーによる実践書、①『小学校作文の授業―練習学習と書くことを楽しむ学習―』(昭和六一年、教育出版センター)、②『小学校作文の単元―個人文集への誘い―』(平成元年、教育出版センター)に関して詳細な考察を加えている。また、白石達による上掲①・②に続く実践書の③『小学校作文の指導―広がる世界・深まる絆―』(平成十三年、銀の鈴社)に関しては、第一二九回の本学会大会において考察を加えた。

なお、これらの実践書は一般の出版ルートに乗っていない書籍なので、大方の目には触れにくい出版物となっている。

今回は平成二十年に刊行された白石壽文・権藤順子編著『小学校作文の生活―子どもを育て、教師と保護者の絆を深める日記指導―』(銀の鈴社)に収録されている実践に関して考察を加えて行くことにする。

二 日記指導に関する先行実践・研究

井上敏夫他編『新作文指導事典』(昭和五七年、第一法規)では、「目的や形態に応じた指導」の中の「記録文」の一種として「日記」が取り上げられている。

この中では、日記指導の意義に関して、「表現力を高め、育てる」とこと、「日記の内容を通して子どもを知ること」とが指摘されている。

また、日記の「指導法・留意点」に関しては、①「記録という点からは、真実を書くようにすること」、②「5W1Hを押さえた記述、また、事実と感想・意見を区分した文章を書くこと」、③「主題を明確にした日記」「何か一つのこと」に注意を集中する生活態度を養うこと」、④「事実をすなおに、注意深く見つめる目、現実について深く考える態度を育てる」、⑤「面倒くさながら書きつづける態度を育てる」、⑥「教師の、子どもに対する姿勢は大きな影響をもつ」ことから、「それに対応する処理のしかたや評価が取り入れられなければならない」、⑦「市販されている形式の決まった日記帳に書かせるより、ノートに自由に書かせるほうがよい」と述べられている。

大熊徹は、「日記指導論―国語科教育における意義と課題―」(『東京学芸大学紀要』第三四集、昭和五八年、大熊著『作文・綴方教育の探究―史的視座からとらえる課題と解決―』平成六年、教育出版、に所収)の中で、明治・大正・昭和戦前期の作文・綴方教授書を主たる資料として取り上げ、日記指導の国語科教育における意義と課題について論じている。

大熊は、自らの十年間にわたる日記指導の実

践と上記の膨大な作文・綴方教授書に対する精細な考察を踏まえて、日記指導における作文指導の意義を①「筆力の暢達」、②「多作」、③「綴方に対する興味」の三点に絞って取り上げている。

また大熊は、日記指導の課題として、①「継続性」、②「指導の時期」の二点に絞って論じている。なお、①の「継続性」に関して大熊は、「児童が日記を通じて毎日指導者に語りかけ」てくることに呼応して、「指導者が評語で児童を励まし指導することの大切さを強調している。

川上繁は、その著『作文・日記・詩の書かせ方―何を・どう書くか―』（平成二年、明治図書）の中で、「子どもが生き生きと書く日記指導」と題して、自らの実践を取り上げ、日記指導の「要点」と「指導法」に関して論じている。

その「要点」としては、①「話題・題材を広げる」ために、「話題・題材書き競争」「話題・題材の焦点化する」「日記に必ず題名をつけさせる」などの実践、②「継続して書かせる」ために、「観察記録を書かせる」「遊んだことを継続して書かせる」などの実践、③「日記を喜んで書かせる指導法」として、「用紙の工夫」「必ず評価をしたい」「詩の日記のすすめ」「音読の活用」などの実践が紹介されている。

川上は、①「生活日記」を「ありのままに書くため指導法」について言及している。「絵や写真などを利用した日記」「題目をつけて書く日記」「事実と感想を分けて書かせる日記」などの実践を紹介している。

続いて川上は、②「考えをはっきり書くため」の工夫として、「朝会日記」「読書の一言感想」「効果的な題名を考える」「書き出しの工夫」について述べている。

また、③「読み手を考えて書く」指導の手立として、「書けない子、書かない子」への手立ても、「日記を書かせる動機づけ」「導入期における日記指導の問題点」について言及している。さらに川上は、④「学級生活に生かす日記の書かせ方」と⑤「日記の見方と評価のあり方」に関して、実践事例を紹介している。

三 先行研究・実践から取り出した日記指導の意義と指導上の留意点

前節で見てきた三つの先行研究・実践から日記指導の意義と指導上の留意点とを、以下のよ

うに取り出してみた。

〔資料1〕

- I 「表現力の向上」につながる実践
- ① 多様な題材で文章のジャンルを広げ、技能の定着を図る。
- ② 表現を工夫し、「書き慣れ」の習慣を付ける。
- ③ テーマを明確にして書ける。
- II 書くことへの興味・関心の持続と書くことの習慣化
- ① 子どもが喜んで楽しく書くための工夫
- ② 書けない子への手立てを講じる。
- ③ 評語によって日記を書き続けることへの意欲を持たせる。
- III ものの見方・考え方の拡充、深化
- ① 事実をありのままに注意深く見つめ、考える態度を育てる。

便宜上、以上の観点により、今回取り上げる日記指導の実践研究『小学校作文の生活』に収録されている実践事例を詳しく見ていくことにする。

四 『小学校作文の生活―子どもを育て、教師と保護者の絆を深める日記指導―』実践の意義と指導上の留意点

(1) 「表現力の向上」につながる実践

① 多様な題材で文章のジャンルを広げ、技能の定着を図る。

この観点では、全学年にわたっての「日記能力表(日記ワークシート能力表)」の活用が注目される。この表では、縦の軸に発達段階、横の軸に「題材・ジャンル・技能・価値観」の四つの観点が位置づけられている。「題材」の軸には、「1遊び」から始まって四九の題材が低・中・高学年ごとに提示されている。

例えば、「題材」を「手伝い」に、「ジャンル」を「手紙」、「技能」を「会話」に選んだ時には、「今日の日記は、お手伝いをしたときのことを、会話を入れながら、先生へのお手紙を書くつもりで書いてみましょう。」という指示が指導者から出されるといえるものである。

この「日記能力表」は題材やジャンルの広がりや技能の定着を図ることと同時に、継続的な日記指導にとっても極めて重要な役割を果たし

ていると思われるので、別紙資料として掲げ、後で詳しく考察を加えていくことにする。

②表現を工夫し、「書き慣れ」の習慣を付ける。

第一学年では、「評価の共有化」によって子どもたちに自分の長所を気付かせ、書き表し方の変化を実感させている。

第三学年では、「段落意識」を付けさせる指導に重点を置いている。また、「アングル日記」として三年生に身に付けて欲しい書く技能を与えている。

第四学年では、「複合語、慣用語、比喻の表現や、会話文の使い方、擬態語・擬声語などの使い方、書き出しの工夫」などが指導されている。また、『うれしい』という一言だけでなしに、その時の言動を書き表す」ことの指導も行われている。

第五学年では、「思いを豊かに表現するために擬態語や擬声語・比喻・心情語などを必要に応じて使用させる」という指導が行われている。第六学年では、『書き慣れ』を中心に、児童に応じて表現の工夫や様々な文種で書かせる」ことが行われている。

③テーマを明確にして書ける。

第三学年では、「観察日記―モンシロチョウの育ち方」で「絵と接続詞を提示し、特徴を一つ入れて書く」指導が行われている。

第六学年では、「テーマに沿った評文でその児童らしい内容や書きぶりをほめることを心がけ、自分のよさを意識させる」指導が行われている。

(2) 書くことへの興味・関心の持続と書くことの習慣化

①子どもが喜んで楽しく書くための工夫

一年生から「年間計画」の下で「アングル日記」「五七五日記」「字数ぴったり日記」「体験日記」「何でも日記」などの日記に応じて多様な手立てが講じられている。

第一学年では、「学級通信、教室の背面黒板、文集、教師の音読など」によって子どもの日記の紹介をしている。

第二学年でも「アングル日記」を通して様々な文種に触れ、表現の楽しさに触れて書くこと自体が楽しめるような指導が行われている。二年生では、題材に応じて「なぞなぞ日記」「吹き

出しつき日記」「えんぴつおしゃべり(筆談)日記」「お願ひ日記」「おすすぬ読書日記」「我が家の動物園新聞」などの多様な日記を書かせている。

第六学年では、「日記能力表」に基づいて、多様な観点をステップを踏みながら児童に提示していくことで、書くことを楽しみ表現力豊かな児童に育てることを目指している。

②書けない子への手立てを講じる。

第一学年では、書けない子には友達の手書き方を紹介してやりやすく書くコツを分らせるように配慮されている。

第二学年では、「良いもの」「長いもの」というプレッシャーを与えず、「質を問わないもの」「短いもの」を計画的に繰り返し指導することを大切にしている。

また、「グループ日記」では、教師も参加して教師や友達の良いところを真似させるようにしている。

第四学年では、「友達の良いところ(書き出しの工夫・五感を使う)」を取り入れて自分の表現に生かす」ようにさせている。

③評語によって日記を書き続けることへの意欲を持たせる。

日記を継続的に書かせるために、全学年を通して、「評語」を書くことを優先するか、「日記」を書く機会を増やすことを優先するかという課題が確認されている。以下のような基本方針が確認されている。

「日記は月曜日から金曜日まで書かせる。」「教師からの返事は、『よし』『なるほど』『分かったよ。』などの一文で返すようにすることを予め児童に伝えておく。」「代わりに、給食や帰りの会にできるだけ多くの友達の日記を教師が読んで聞かせる。」「褒めることを基本とする。」「間違いに関する指導は『評語』の中でさりげなく行いたい。」などが確認されている。

返事を書くときの工夫としては、「返事を書く時間を確保する。」「記号やサイドラインを使う。」「書けない児童への配慮を行う。」などが提案されている。

また、「活用」も児童にとっては大きな「評価」となるので、「掲示板での紹介」「日記の〇〇賞としての紹介」「保護者からのコメント」「友達同士でのよささがし」などが必要であるとしている。

第三学年では、「評文、丸つけ」では、日記の内容に共感するようなコメントを心がけ、技能、表現で優れた箇所に赤線を引き、○印をつけてやる。

また、「評語によって、自分の文章の良いところを確認させて自信を持たせ、活用することで友達の文章から豊かな語彙や表現を学ばせる」ように配慮している。

第六学年では、「評語」の型を「質問型」「疑問型」「感想型」「回答型」「指導型」「文中に相づち型」に分類して書いてやっている。この「評語」の型の提示という実践は、継続的な日記指導の上からも重要な意義を有していると判断されるので、後で詳しく考察を加えたい。

(3) ものの見方・考え方の拡充、深化

①事実をありのままに注意深く見つめ、考える態度を育てる。

第四学年では、日記の内容面での充実を図るため、「顧みる心」「感じる心」「気づく心」「想像する心」という四つの観点を設けて指導している。

第五学年では、「ズームアウト！ もう一つの目をもって書く日記」という実践で「ものの見方・考え方」を広げることが目指されている。また、「日記能力表」によって、「過去、現在、未来について」「出来事について立場を変えて」「出来事についてプラス面とマイナス面から考える」という三つの指導している。

今回取り上げた実践研究から取り出した以上の意義と実践上の留意点の中から、とりわけ重要な意義を有する提案と思われる三点についてより詳しい考察を加えておくことにする。

五 特色三点―「アングル日記」「日記能力表」「評語の型」―

(1) 「アングル日記」について

「アングル」とは、物を見る角度・観点のことである。「アングル日記」とは、当該学年として「身につけてもらいたい書く力の技能をアングルとして分け」た日記のことである。

この「アングル」は教師が指定することになっている。

「アングル日記」は主に第二学年で紹介され

ている。事例報告の中からだけでは、「アングル」の自身が明確にはならない。「200字ぴったり日記」の事例から判断するに、「ある一定量の文章を書く力」がこの場合の「アングル」に該当するようである。

第二学年の「ぐんぐん日記」の実践報告の中に「二年生日記学習指導年間計画」が紹介されている。

これによると、一年間の日記指導計画が掲載されている。月別に「日記名」「日記題材例」「目標」、そして教科書教材との連携を意図して教科書の「単元名（教材名）」が掲げられている。

これらの記載事項の中の「目標」部分に「身につけてもらいたい書く力の技能」としての「アングル」が提示されていると見なしてよいだろう。

例えば、四月の「話した日記」の場合では、「目標」として『『会話文』を文中で意識させる』とある。五月の「見つけた日記」では、「五感の『視覚』を生かした題材を見つけてさせる」とある。六月の「へんしん日記」では、「視点を変えて書くことと、見方・考え方を広げさせる」とある。

九月の「びったり日記」では、「目標」が「指定した文字数びったりになるように書かせることと、文章を構成する力やことばを選ぶ力をつける。」となっている。十月の「どっち日記」では、「どっちがいいかを理由つきで書かせる」とある。

一月の「リレー日記」では、「目標」が「友だちの日記に変じを書いたり、自分の日記を付け加えたり、また、物語をリレーして書くなど、自分以外の文章に触れることで文章の広がりを持たせる」とある。二月の「何でも日記」では、「自分の『おすすめことば』を日記の最後に書かせ、文章やことばを工夫することを意識させる」とある。

これらの「目標」部分のおおむね前半部分が「アングル」に該当すると見なすことができるであろう。

要するに、「アングル日記」とは、作文指導の一環としての日記指導として、「書くことの技能」を明確化した実践上の重要な方策の一つと見なしておいて良いだろう。

(2) 「日記能力表」について

「日記能力表」については、すでに前節で取り上げている。第三学年で「書く生活につなぐ

日記指導Q&A・日記能力表」に紹介されているものである。

さて、この中で、「日記能力表」が作成される背景が述べられている。

白石壽文たちの作文教育研究会において、これまで児童たちが書いてきた日記を持ち寄り、読み合う中から、次のような感想が出されてきたというのである。

〈資料2〉

○「同じような題材が多いね。」

○「出来事を思い出したとおりに書く子がほとんどだよ。」

○「気持ちを書く子と書かない子の差が大きいよ。書いていても『楽しかった』『うれしかった』など、直接的な表現が多いね。」

○「情景描写や比喩などを使う子は、高学年でもごく少ないよ。」

○「会話文の無い日記も多いね。書き出しも『今日、わたしは……』がほとんどだよ。」

○「(どう)書けばいいの()って訴えているような日記が多いね。」
(二一九頁)

作文教育研究会のメンバーから出されたこれらの感想に対して、こうした実態が見られるのは、「指導者が、日記の書き方について丁寧な指導をやっていたいなかったこと」に原因があると分析がなされている。

そこで、「児童が書くことを楽しみ、表現力が豊かになっていくためには、日記を書かせる際に多様な視点を与えることが大切である」と考えたとのことである。

その視点として取り出されたのが、「題材」「ジャンル」「技能」「価値観」の四点である。

この四点を「それぞれに低学年、中学年、高学年の発達段階を考慮」してまとめられたのが「日記能力表」なのである。

「アングル日記」の「アングル」も「技能」として、この表の中に盛り込まれている見なすことができよう。

本レジュメの最後にこの「日記能力表」の写しを掲げて置いたので、全体の組立を眺めて頂きたい。

この「日記能力表」の組立と活用の仕方については、先に「A 題材」の「3 手伝い」の

事例を取り上げて説明したので、ここでは省略に従う。

活用の際の留意点についても触れられている。

「題材・ジャンル・技能・価値観のすべてを取り入れると、児童にとつての負担が大変大きくなりますから、例えば『今日は題材だけ決めておこうね。』など、易しいところから始めることが大切です。」と述べられている。

大切な留意点であると言えよう。

なお、この「日記能力表」を実際に指導する際に活用する時は、但し書きとして記載されている「日記ワークシート」が作成されて子どもたちに与えられるということになる。

その一例が、本レジュメの別紙「日記能力表」の中に添えられているようなものである。

この「日記能力表」によって、全学年の日記指導が見渡せ、発達段階に応じて、計画的・機能的に指導していくことが可能となる。

作文教育研究会による共同研究の大きな研究成果の一つと見なすことができよう。

(3) 「評語」の型について

「評語」の型については、第六学年の『児童理解』を意識した評語の中で紹介されている。以下のような型である。

〈資料3〉

「質問型：知りたいことを聞くように。」
「感想型：同じ立場から。違った立場から。」
「指導型：表現や構成、題のつけ方など。」
「疑問型：分からないことを聞くように。」
「回答型：質問や疑問に答えるように。」
「文中に相づち型：『へえ〜』なるほど』など。」
(二一九頁)

以下に、児童の日記に添えた「評語」の事例を紹介しておこう。

〈資料4〉

公開授業

十二月二日(金)に公開授業があった。

朝、学校に来ると、ビックリ！教室の窓が一枚もない。この寒い中、一〜四時間目まで、とても寒かった。いつもは、ドアや窓を閉めて、みんなの体温で温かい教室なんだけど、今日は、ずっと空気の入れかえ状態だった。

今、公開授業の三分前。人がどんどん集まってきている。なんか、ドキドキしてきた。

(中略)

公開授業が、やっと終わった。終わってみると、長かった四十五分がほんの少しの時間感じてきた。ちよつとびっくりしたけど、おもしろい公開授業だった。先生は、どれくらいびっくりしましたか？

「評語」：「びっくり」はしませんでしたが、かなり「緊張」していました(笑)。みんな以上にドキドキしていたんですよ。次は「緊張していた先生」という日記にチャレンジ？
みんなのがんばっていた姿、校長先生がほめてくれていたよ。

(二二二頁)

右の「評語」は、児童からの「質問型」に対して、教師からは「回答型」「指導型」で対応した事例である。このように、一つ以上の型を交えて添えられる「評語」もあつてしかるべきであろう。

この実践を行った教師は、実践のタイトルにもあるように、日記指導を通して「児童理解」を深めていくことを心がけてきたと述べている。その時々、日記に「誉める」「励ます」「同調する」ことを意識して「評語」を書いてきたとのことである。

なお、この教師は、一人一人の児童に対して、次の様な「一言日記」を書き続けてきたという。

〈資料5〉

教師の一言日記(年間一人あたり百字程度一部抜粋)

- 4/7 はじめまして。一年間、よろしくね。
- 4/21 歓迎遠足では、一年生のお世話、楽しくやってあげていたね。ありがとう。
- 5/2 おばあちゃんの目の手術、成功したんだね。ほっとしました。
- 5/17 バレーの試合。三連続優勝！ 相手チームも必死です。気を抜かないように！。
- 6/8 おばあちゃんが入院。一番の薬は、孫の顔を見ることだよ。時間があれば、お見舞いに行つてね。
- 6/26 NRTのテスト。やっぱり理科に強いですね！
- 7/3 「代かき」では、泥まみれに…。いい写真が撮れたよ。(笑)
- 7/20 通知表をもらった後の日記。二学期のやる気が、伝わってきたよ！

8/3 図書室では、物語をたくさん借りていたね。感想文が楽しみなな。

(以下略)

(二二三～二三四頁)

このような教師の「一言日記」を書き続け、保護者懇談会では、これらのコピーしたものを配布している。教師と保護者との絆を深めていく上でも役に立っていたであろうと推測される。児童に対して、卒業式の前日に「児童が書き綴った日記のファイル」と教師の「一言日記」とを手渡ししている。

この実践事例からは、教師からの「評語」によって、子どもたちに日記を書き続けていくことへの意欲と、「書くこと」に喜びや達成感を持たせ、「児童理解」への一助にもなっていたことが窺える。

六 意義と課題

今回取り上げた白石壽文・権藤順子達による日記指導の実践についてまとめておこう。

まず、共同研究の成果として見過ごせないのは、「日記能力表」の作成という点である。

この表によって、全学年の日記指導を俯瞰できて、発達段階に応じた計画的・機能的に指導を進めていけるようにした功績は、日記指導研究の上でも特筆できるものと言えよう。

また、この「日記能力表」の中に設けられている観点の一つである「技能」を「アングル日記」として、「日記学習指導年間計画」の中に、具体的な「日記名」と「日記題材例」とセットにして提案したことも注目すべき功績と言える。

この「アングル日記」は、日記指導を作文指導の一環として具体的な実践例と共に紹介したものととして意義深いと言える。

さらに、六種類の「評語」の型を具体例に基づいて提案したことである。教師からの「評語」によって、子どもたちは日記を書き続けていくことへの意欲と、書くことの喜びや達成感が与えられていくのである。

課題としては、実践報告の中で「日記：わたしの思い」や「私の願い」、「これからへの期待、展望」の部分に紙幅を費やしすぎている点である。その分、多様な日記指導のための「日記ワークシート」そのものを紹介して頂きたかった。